

日本におけるラクロスの普及と発展に関する一考察 A study on diffusion and development of lacrosse in Japan

1K09B205 矢崎 玄樹
指導教員 主査 作野 誠一 副査 石井 昌幸 先生

【本研究の動機】

筆者は「カレッジスポーツ」という言葉に惹かれて、大学入学と共にラクロスを始めた。また、大学3年次（2011年）には所属する早稲田大学ラクロス部が25周年を迎えた。ラクロスに携わる中で、これらは、なぜラクロスが25年足らずで、大学生を中心に普及してきたのかという疑問に変わっていった。この疑問を解決するために日本ラクロス史をまとめ、普及に尽力してこられた人々の想いを知ることは、さらなる発展のために非常に重要であると考えた。

そして、筆者の人格形成に大きな影響を与えたラクロスというスポーツの起源・変遷・普及のプロセスを知ろうとすることは、自分自身の純粋な探求でもあり、同時に、さらなる発展のために提言をまとめることは、自分を成長させてくれたラクロスに対する恩返しであると考えている。

【本研究の目的】

本研究はラクロスの起源から現在までの歴史の変遷や普及策をたどる。その中で、なぜラクロスは25年という短い期間の中でカレッジスポーツとして発展したのか、その背景を明らかにする。そして現在の日本ラクロスの課題を考察し、今後の発展に向けての提言をまとめ、今後のラクロスの普及・発展に少しでも貢献したい。

【本研究の方法】

本研究は主に文献研究によって行われる。また日本ラクロス界のパイオニアへのインタビュー調査を行い、日本における歴史の変遷をまとめると共に、現在の課題や今後の方針を調査する。それ以外に補足として、インターネット上の情報を適宜参考にする。

【ラクロスの歴史】

ラクロスは北米先住民族のインディアンがスピリチュアルなゲームとして戦士としての訓練や様々な神事を目的に始まった。千人ものプレーヤーで構成され、二つのゴールは何キロにも離れていた。1試合3日におよび、ほとんどのプレーヤーがボールには触れず、プレーヤーは棒で相手を傷つけることに尽くしていた。

1867年のカナダ自治領が成立し、ラクロスはカナダの国技と設定されると、モントリオールの歯科医、W・ジョージ・ビヤーズはカナダ・ラクロス協会を発足させ、競技ルールを明文化。スポーツとしてのラクロスが広がっていった。

【日本におけるラクロスの普及】

日本では、1986年に慶應大学の学生がアメリカ大使館に問い合わせをしたのがラクロスの始まりである。電話を受けたリリオ・エンドー氏らの「貿易摩擦などの問題を抱える今日の世界におい

て、大人になってから外国とのビジネス抜きの人間関係を構築することは困難なことである。利害関係のない学生時代にスポーツを通じた友人関係を少しでも多くつくるのが、20年、30年後の国際社会の中に摩擦や対立のない環境をうち立てる」という考えのもと日本にラクロスが輸入され、慶應大学を中心に学生の間で広まっていった。

協会理念の中でもLacrosse makes friendsは大切なスローガンとされ、この理念のもとリーグ戦や国際親善試合の開催がなされた。国際親善試合の開催にあたってはチケットに“Everybody is a Hero in LACROSSE”と書かれるなど、日本ラクロスはボランティア精神の下で、一人ひとりが自身の意志で役割を全うしようと呼びかけた。大学生を中心にこの考えは受け入れられ、急速な広がりを見せていった。

【考察】

ラクロス協会へのインタビュー調査や普及状況から、日本ラクロスの課題について考察した。

① 人材不足

特にコーチ・審判についての人手不足があげられる。コミュニティの強化による動機付けや審判着の統一、コーチ・審判紹介等で解決をめざしている。

② ラクロス協会会員登録者

1994年に登録者数1万人を突破して以降、2002年までゆるやかな増加を続けた。しかし2002年以降14,500人程度で横ばい状態が続いており、会員増加に歯止めがかかっている。

【提言】

日本ラクロスの歴史や課題の考察を踏まえて、日本ラクロス発展に向けての提言を行う。

① 日本ラクロスの原点に立ち返る

25年という短期間の間に広まった理由として、学生一人ひとりが自らの意志で行動を起こし、自らの手で学生に呼び掛けを行ったことがあげられる。その背景には日本ラクロスの原点が見え隠れしている。さらなる発展のためには、もう一度、全ラクロス関係者に原点となる考えを伝え、一人ひとりが発展のために自らの意志で行動することが求められる。

② マスターリーグの創設

大学卒業と共にラクロス界から去る関係者が多く、その理由として生涯スポーツとしてラクロスが選択肢に入っていないことが考えられる。そこで35歳以上のマスターリーグを創設することで、社会人になっても、ラクロスを生涯スポーツとして取り組める環境が整備される。そうすることで、課題である人材不足や会員数の横ばいを解決することにもつながるであろう。